

2025. 11. 1 第 35 回幼児教育研究集会

先日、第 35 回幼児教育研究集会が行われました。県内外から 150 名の先生方が当日の保育を見て、分科会で語り合いました。シンポジウムでは、白梅学園大学名誉教授 無藤隆先生 福井大学名誉教授 松木健一先生をシンポジストとして、福井大学連合教職大学院教授 岸野麻衣先生をコーディネーターとしてご登壇いただき、「一人一人の好きから遊びにおける展開の可能性を探る」についてお話しいただきました。

シンポジウムの中では、石集め、ダンス、匂い集め、泥団子作りといった具体的な遊びの実践が紹介され、それらが子どもの自発的な活動から始まり、保育者の適切な関わりや子ども同士の協働によって、より深く、広く展開していくプロセスについてのお話があり、特に、異なる興味を持つ子ども同士が関わることで、予期せぬ「化学変化」が起き、認識が飛躍的に広がることも話題にあがりました。

また、遊びは単なる活動に留まらず、子どもがルールや法則を発見し、体験を言語や図で表現する「言語化」の過程を通じて、小学校以降の探究学習や抽象的な思考の土台を形成すること。子どもに固定観念を押し付けず、主体的な発見や創造を尊重し、自らも探究する姿勢を見せることで、子どもの学びを豊かにしていく役割が保育者には求められるとも話されました。

無藤先生は、幼児期は、自然のかすかな匂いや地味な石の質感など、身の回りの「ささやかな呼びかけ」を感じ取る感性を育てることが極めて重要である。豊かな感覚体験が、物事の微妙な差異を味わう能力の土台となるというささやかな感覚の感受性についてのお話がありました。

また、松木先生からは、子どもの遊びは「好き」という感情から始まり、「好き」は、①知りたい・わかりたいという「モノ・コトへの欲求」、②一緒にいたい・関わりたいという「人への欲求」、③なりたい・実現したいという「自己への欲求」などの原動力となるという、「好き」という感情の多面性にも言及いただきました。

さらにお二人から、幼小接続にもつなげながら、「言語化」の促進についても話題にあがりました。「具体的な物や現象を目の前にして語ることで、言葉と体験を結びつける」という実物をもとに語る大切さ、「物を並べたり、絵を描いたりといった行為も、考えを整理し表現するための広い意味での『言語』として捉える」ということなど幼児なりの遊びをどう言語化としてとらえていくか、という部分においてもいろいろ考えるきっかけになりました。

年齢別分科会では、市町幼児教育アドバイザーの先生方が各グループのファシリテーターとなって、3～4 人のグループでその日の子供たちの姿について語り合い、保育者の関わりも含め、お互いの気付きの共有、そこから浮かび上がるキーワードを探っていきました。

「子供同士の関わりを大切にしつつ、友達の意見にその子の思いが流されないように、一人一人の思いを尊重している。」という保育者の姿から、自己決定につながる保育者の仲立ちや保育者との信頼関係について読み解くグループ、「安心、安全な基地の中で、3 歳児以上の探究が感じられた。」という子供たちが自己発揮していくためにはまずは園が安心できる空間であることの大切さなども改めて共有しました。他にも「初めて会った先生方と同じ年齢の子供たちの遊ぶ姿を通して語り合うことは、いろいろな視点に気づくことにつながり、自分の保育観を揺さぶられました。グループの中で出た問いについても、あらためて考えることができ、こうして語り合うことの重要性を感じました。グループでの対話後に県や大学の先生方から、まとめていただいたり、ご意見をいただいたりしたことで、この対話の時間の意味づけをしていただけて貴重な時間になりました。」などの感想をいただき、改めて研究集会を行う意義をも感じることができました。大変学び多い、充実した一日となりました。ご参加くださった先生方、本当にありがとうございました！

また研究集会以外でも、1月、2月と園内研究会や月曜カンファレンスを公開しております。すでにお申込みも多数いただいておりますが、これからも幼児教育をさらに深めていくために、このような様々な先生方との語り合いを大切にしていきたいと思います。

